

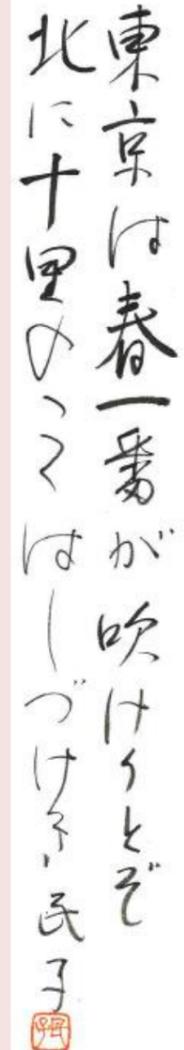
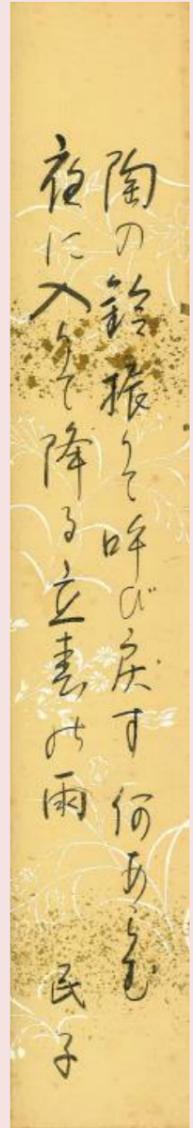


# 民子、春を詠む

## —花のにおい、風のささやき—

2022年3月7日(月)～5月4日(水)

No	種別	内容
1	自筆歌集	『はるのワルツ』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「山焼くと寧楽の町人集まりても言ひかはす浅春のかげ」
2	自筆歌集(写真)	『はるのワルツ』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「春山のなだりはまろし若鹿の追はれて下るかげとひかりと」
3	書籍	『光たばねて』 大西民子 著 1998年3月刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌「女子大はひつそり今も在りしとぞ若草山を燃やす日に行けば」
4	自筆原稿	「遠足の歌」
5	自筆歌集	『夕ぐれの歌』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「ふるさとゆ遠き寮舎に桃花活けてひいなをまつる十九の春や」
6	自筆歌集(写真)	『びわの花』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「あはれかの奈良のそのどんちやうの花こそ泣かまほしけれ」
7	自筆歌集(写真)	『わかたつむ歌』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「逢ふこゝろこむすめのごとはずませて人迎へに急ぐ野路の春風」
8	自筆歌集	『回顧一年』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「をとめの日の夢は破れて春の夜の月仰ぎつゝ君にそひて帰りぬ」
9	自筆歌集(写真)	『回顧一年』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「春の夜の更けて明るき灯の下に笑みつゝぞ吾ら論じつきなく」
10	自筆歌集(写真)	『回顧一年』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「悔多き一年のたつきふみこえて相寄る春の待ち遠きかも」
11	自筆短冊	「陶の鈴振って呼び戻す何あらむ夜に入りて降る立春の雨」
12	自筆原稿	「はこべらの萌ゆる日なたに集まりてついでむ鳥はいづこより来る」
13	自筆原稿	「旧道のほとりは莠芽ぐみたり橋渡り来る足白き犬」
14	書籍	『風水』 大西民子 著 1986年8月刊行・初版 沖積舎 掲載歌「妹の逝きて八年坐らなくなりたる雛は立てかけて置く」
15	自筆短冊	「東京は春一番が吹けりとぞ北に十里のここはしづけき」
16	自筆色紙	「あたたかき雨となりたりふるさとの桑の若葉もほぐれむころか」
17	人形	民子所有のちりめん雛
18	自筆原稿	「雛のうた」



大宮に来てからも、民子は何気ない日常を春に託した歌を作っています。

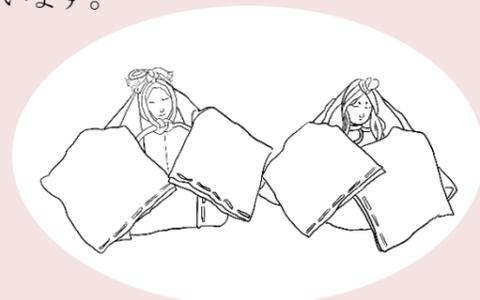
「はこべらの萌ゆる日なたに集まりて  
ついでむ鳥はいづこより来る」(No.12)

「旧道のほとりは莠芽ぐみたり橋渡り来る足白き犬」(No.13)

「東京は春一番が吹けりとぞ  
北に十里のここはしづけき」(No.15)

いづれも民子を取り巻く自然の情景を素直な気持ちで歌にしています。

多忙な民子でしたが、妹の佐代子と一緒に雛人形を出して祝う雛祭りの行事を、毎年楽しみにしていました。1980(昭和55)年3月1日の「毎日新聞」に寄せたエッセイ「雛のうた」では、子どもの頃の思い出に触れつつ、小さくて細やかな調度品の愛らしさといい、雛祭りは幾つになっても心が華やぐ女の祭りだと書いています。佐代子が亡くなり一人暮らしになってからは、<sup>つま</sup>儉しく祭りを楽しんでいたのか、所有していたちりめんの雛人形が今も遺されています。



(左)自筆短冊「陶の鈴振って呼び戻す何あらむ夜に入りて降る立春の雨」(No.11)

(右)自筆短冊「東京は春一番が吹けりとぞ北に十里のここはしづけき」(No.15)

参考文献

- 『奈良公園史』 奈良公園史編集委員会/編 奈良県 1982年
- 『自解100歌選 大西民子集』 大西民子/著 牧羊社 1986年
- 『回想の大西民子』 北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
- 『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』 さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
- 『無告のうた-歌人・大西民子の生涯-』 川村杏平/著 角川学芸出版 2009年
- 『大西民子-歳月の贈り物-』 田中あさひ/著 短歌研究社 2015年
- 「国立大学法人 奈良女子大学 ホームページ」<https://www.nara-wu.ac.jp/>

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。  
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で逍空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2022年3月7日

さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1  
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460

# 1 春に奈良へ

東北の盛岡市に生まれた大西民子にとって、雪解けの春は、四季の中でも特別な想いを寄せる季節でした。

民子は17歳の時、合格した奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)に向かう道中で、はじめて温暖な関東や関西の景色を目にしました。その時の思い出を、1968(昭和43)年の「短歌研究」4月号に「遠足の歌」と題したエッセイで次のように書いています。



自筆原稿「遠足の歌」(No.4)

「奈良へ遊学できる喜び、それは今思い返してもぞくぞくするような幸福感であった。昭和十六年の四月、父につれられて始めて見る奈良への旅、車窓は荒い山肌はまだ雪の消え残る盛岡を離れて菜の花畑の美しい関東平野、そして桃や桜の咲きかかる関西へと風景を移して、見るもの聞くものすべてに心はずむ旅であった。一面の菜の花畑を見るのさえ生まれて始めてだったのである。」

はじめて見る多様な春の景色は、民子の目を見張らせ、その感慨もひとしおだったのでしょ。

# 2 古都の情景

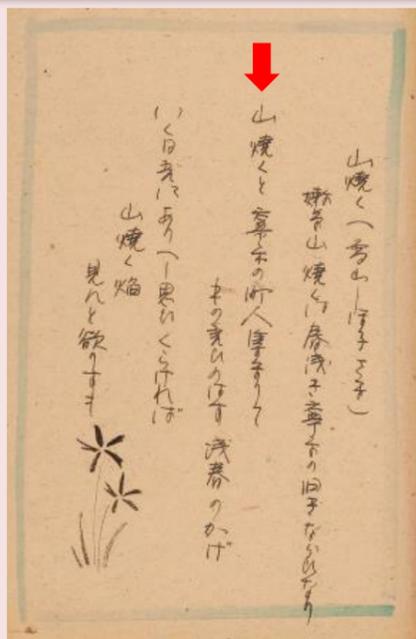
1941(昭和16)年、奈良女子高等師範学校に進学した民子は、学校の寄宿舎から通学する毎日を過ごしていました。

盛岡高等女学校時代から短歌を作り始めていた民子は、折々の奈良の四季を題材に選び、春の行事や風景についても詠んでいます。民子の学校は、奈良の中心街にあり若草山からも程近い距離でした。そのため、奈良の早春を告げる若草山の山焼きについても

「山焼くと寧楽の町人集まりて  
もの言ひかはす浅春のかげ」(No.1)

と、祭りを前に町の一角に集まり、賑やかに会話をかわす人々の光景を詠んでいます。

『はるのワルツ』(大西民子手作り歌集) 1944年6月  
「山焼く」と題し、早春の奈良に伝わるならわしと説明しています



充実した学生生活を送っていた民子ですが、時に親元を遠く離れた淋しさを感じることもあったようです。19歳の春に雛を寄宿舎に飾っていると、両親と妹のいる故郷を思い出したのか、

「ふるさとゆ遠き寮舎に桃花活けて  
ひいなをまつる十九の春や」(No.5)

と歌に詠んでいます。

写真「若草山の鹿たち」  
民子所蔵アルバムより



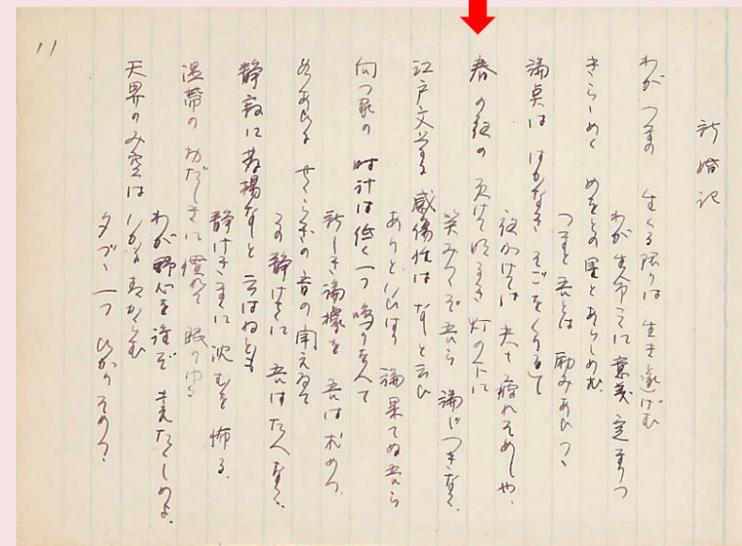
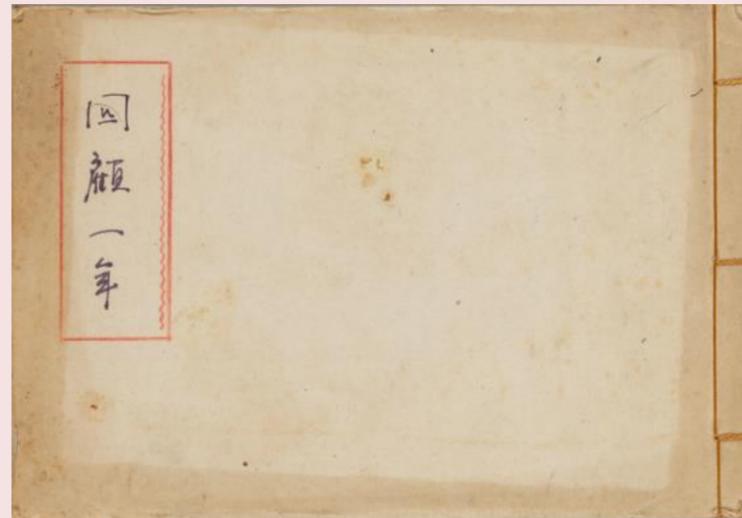
# 3 岩手、もしくは民子の春

1944(昭和19)年に女子高等師範学校卒業後、故郷の岩手に戻った民子は、釜石市内にある学校の教員になります。

戦後の1947(昭和22)年3月に、民子は実家の家族の反対を押し切り、同じ釜石で教員をしていた大西博と結婚しました。のちに夫とのすれ違いや、別居・離婚を題材にした歌で有名になった民子ですが、当時としては珍しい恋愛結婚だったため、新婚間もない頃に詠まれた歌には、

「春の夜の更けて明き灯の下に  
笑みつぞ吾ら論じつきなく」(No.9)

のように、幸福な生活を思わせるものがあります。この歌は、1949(昭和24)年に雑誌「歌と随筆」に、民子が「回顧一年」の題で応募した50首のうち、「新婚記」の章に収められた歌で、夫婦が笑い合いながら熱心に語り合う様子を描いています。民子にとって、大人になってからの岩手の春の記憶は、夫との恋愛や幸せだった新婚生活という、自分自身の春の記憶と結びついていたのかもしれない。



『回顧一年』(大西民子手作り歌集) 1948年頃  
1947年春から1948年春までの結婚、出産、そして病氣療養の一年を歌にしており、後に師となる木俣修からは3位に選ばれています。